



**Data**

監督・製作：クリント・イーストウッド

原作：クリス・カイル、スコット・マクイーウェン、ジム・デフェリス『ネイビー・シールズ 最強の狙撃手』（原書房刊）

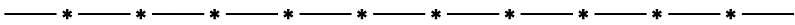
出演：ブラッドリー・クーパー/シエナ・ミラー/ルーク・グライムス/ジェイク・マクドーマン/ケビン・ラーチ/コリー・ハードリクト/ナビド・ネガバン

## 👁️👁️ みどころ

今や「枯れた境地」に達しているはず(?)の「人生の達人」クリント・イーストウッド監督が、なぜ今イラク戦争における「伝説の狙撃手」を題材とした本作を? 「羊、狼、番犬」という三分法の是非や、「神、国家、家族」の優先順位のあり方という根本問題に立ち入りながら、それを考察したい。

他方、160人も射殺した「レジェンド」はなぜ、帰還後PTSDの症状を? 本作後半では、そんな問題提起をじっくり考えたい。

しかし、『スターリングラード』(01年)や『ハート・ロッカー』(08年)に比べると、いかにクリント・イーストウッド監督作品といえども、本作のような作り方ではアカデミー賞作品賞はムリ・・・?



## ■□クリント・イーストウッド監督はなぜ今こんな題材を? ■□

本作は「伝説の狙撃手」と呼ばれた実在のスナイパー、クリス・カイルを主人公とした映画で、原作は、クリス自身がスコット・マクイーウェン、ジム・デフェリスと共に書いた『ネイビー・シールズ 最強の狙撃手』。この原作はニューヨーク・タイムズ紙のベストセラー第1位を13週にわたり独走したそう。しかし今ドキ、それは「伝説の狙撃手」を称える人たちがばかりが購入したものではないはずだ。

『父親たちの星条旗』(06年) (『シネマルーム12』14頁参照)、『硫黄島からの手紙』(06年) (『シネマルーム12』21頁参照)以降戦争映画を撮っておらず、人生の達人的な境地に達する(?)中で撮った最新作『ジャージー・ボーイズ』(14年)では、懐古趣味に浸りつつ(?)、しっかり真実性とエンタメ性を両立させた (『シネマルーム33』



7月8日発売【初回限定生産】アメリカン・スナイパー ブルーレイ&DVDセット ¥3,790円+税  
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント

290頁参照) クリント・イーストウッド監督が、今なぜそんな題材に興味を？

クリスは米軍史上最多160人を射殺した狙撃兵だから、アメリカ側からみれば彼は英雄。しかし、イラク側からみれば彼は「ラマディの悪魔」と怖れられ、その首には2万ドルの懸賞金がかけられたそう。そんな伝説的スナイパーの半生を、クリント・イーストウッド監督は一体どんな視点で描こうとしたのだろうか？

本作のパンフレットにある、町山智浩(映画評論家)の『『アメリカン・スナイパー』論争とPTSD』という「REVIEW」によれば、2015年1月16日に全米公開され、週末だけで1億500万ドルの興行収入をあげた本作の評価は、真つ二つに割れ、いわば「文化戦争」が勃発したそう。アメリカの「二大政党制」を構成する民主党と共和党の違いを含めて、この「REVIEW」は必読だが、さて1930年生まれのクリント・イーストウッド監督は、本作でどんな立場や視点からクリス・カイル像を・・・？

## ■□ 『ハート・ロッカー』 VS 本作、873個 VS 160人 ■□

イラク戦争を題材とした映画では、第82回アカデミー賞で9部門にノミネートされ、作品賞、監督賞、オリジナル脚本賞、編集賞、音響効果賞、録音賞の6部門を受賞した、女流監督キャスリン・ビグローの『ハート・ロッカー』(08年)『シネマルーム24』15頁参照)が有名。その主人公になったのは、爆発物処理班のウィリアム・ジェームズ二等軍曹(ジェレミー・レナー)だ。

私は『ハート・ロッカー』の評論を書くについて、「処理した爆発物数 VS 魁皇の幕内通算勝ち星数」という「小見出し」の中で、「魁皇の勝ち星を上回るのが、本作の主人公ウィリアム・ジェームズ二等軍曹の爆弾処理数873という数字だ」と書いた。それに対して、本作の主人公となった米海軍特殊部隊ネイビー・シールズの狙撃兵クリス・カイル(ブラッドリー・クーパー)が射殺したのは160人というから、これもすごい。

第2次世界大戦中の狙撃兵を主人公とした名作が『スターリングラード』(01年)『シネマルーム1』8頁参照)だが、私はこの映画で狙撃兵の大変さを理解することができた。

兵器の進歩が急速に進んでいるとはいえ、160人という数字（実績）はすごいし、1～2kmも遠くにいる特定の人物を狙撃するというテクニックもすごい。しかし、あくまで数字は数字。本作は第87回アカデミー賞で作品賞、主演男優賞、脚色賞、音響編集賞、録音賞、編集賞の6部門にノミネートされながら、結局、音響編集賞しか受賞できなかったが、それはなぜ？新聞紙上における本作の評価は絶賛に近いモノが多いが、ゴマすり評論にならないためには、そこらあたりの問題点をきっちり掘り下げる必要があるのでは？

## ■□■あなたは羊？狼？番犬？そんな三分法の是非は？■□■

生まれ故郷のテキサスから、狙撃兵としてイラクの戦場へ4度も、『ネイビーシールズ』（12年）（『シネマルーム29』126頁参照）で観たように、「ネイビー・シールズ」は米海軍最強の部隊だが、4度も戦場に赴くとシールズでの戦友であったマーク・リー（ルーク・グライムス）、ビッグス（ジェイク・マクドーマン），“D”（コリー・ハードリクト）たちも次々と負傷したり、死亡したり・・・。

良くも悪くも、クリスはアフガン戦争とイラク戦争を主導したアメリカの第41代大統領ジョージ・ブッシュと同じように、アメリカのテキサス州を代表する性格の男であり、共和党色いっばいの男。彼がライフルを愛すると共に、狙撃兵として海兵隊員を護衛する任務を天職と考え、それに専念することになったのは、少年時代に父親から受けた教育の影響が大きそうだ。父親の男の子に対する教育方針はシンプルで、「人間には3種類ある。

“羊、狼、番犬”だ」というもの。その選択肢の中でクリスが選んだのが番犬。その結果、弟のジェフ・カイル（キアア・オドネル）が同級生からいじめられているのを見ると、猛然とその相手に飛びかかって馬乗りとなり、トコトン殴り倒すという行動を。今の日本の教育方針からみれば、これは「如何なもの？」となるところだが、クリスの父親はこれを食事の席で称えたからすごい。現在日本では、男子スキージャンプ選手として20年以上のキャリアを続け、40歳を超えてなお一線級の成績を上げている葛西紀明が「レジェンド（生ける伝説）」と称えられている。それと同じように、少年時代から番犬として生きることの訓練を積んだクリスは、ネイビー・シールズの一員として戦闘に参加する中で狙撃兵としての能力を次々と発揮し、たちまち「伝説」と呼ばれるほどの存在に。

日本の国会では現在、「安保法制」をめぐる議論がスタートしているが、人間を羊、狼、番犬と三分する考え方は、今の日本では到底受け入れられるものではない。しかし、アメリカでは現にそういう価値観があり、そんな中でクリスのような英雄（もしくは悪魔）が育ち、大きな役割を果たしたことをしっかり認識する必要がある。

## ■□■神、国家、家族の優先順位は？■□■

昨今頻発している、「イスラム国」によるキリスト教＝十字軍を敵とみなしたテロ行為をみていると、古代から中世、そして近代へと続いている「宗教対立」の根の深さを思い知ることになるが、幸か不幸か日本人は、そんな宗教対立の感覚は薄い。アメリカの大統領選をめぐる民主党VS共和党の対決も、実は同じキリスト教内の宗派をめぐる争いが大き

いが、それも日本人にはあまりよくわからない。テキサス州という、共和党が強く、保守的な地域に育ったクリスには、羊、狼、番犬という3種類の人の中から選択の他、神、国家、家族の優先順位をどうつけるかというテーマが常に頭にあったようだ。ネイビー・シールズの精鋭になった直後に、バーで見つけた魅力的な女性タヤ・カイル（シエナ・ミラー）と知り合ったクリスにとって、その時期の最優先の関心はタヤだっただろうが、イギリスへの派遣が決まると、彼の優先順位のつけ方は・・・？

本作を観ていると、今の戦争では銃と共にケータイを所持しており、いよいよ戦闘開始という直前でも、妻との通話が許されていることにビックリ。しかし、これは決して国家より家族を優先しているわけではないことが、クリスの姿を見ているとよくわかる。1回目、2回目の派遣は、家族より国家を優先するのでもいいだろう。しかし、銃弾の中で過ごす夫の姿を常に想像しながら自宅で待つ妻の立場からいうと、3回目、4度目は国家より家族を優先してもいいのでは・・・。ついそうってしまうのは仕方がない。日本の自衛隊員が、神、国家、家族の優先順位をどのようにつけているのかは知らないが、本作でクリント・イーストウッド監督が突きつけるそんな問題提起を、あなたはどうか受け止める・・・？

## ■狙撃兵同士の「頂上対決」に注目！■



7月8日発売【初回限定生産】  
アメリカン・スナイパー フル  
レイ&DVDセット  
¥3,790円+税  
ワーナー・ブラザーズ・ホーム  
エンターテイメント

『スターリングラード』では、ジュード・ロウ扮するソ連の狙撃兵ヴァシリと、エド・ハリス扮するナチス・ドイツ軍きっての狙撃の名手ケーニッヒ少佐との対決が、最大の見モノになっていた。そこで私はそれについて、「西部劇や黒澤映画の名場面とも共通するもので、そのスチール1枚で、素晴らしい絵となる」と書いた（『シネマルーム1』10頁参照）。それと同じように、本作でイラクの反政府武装勢力から「ラマディの悪魔」と言われたクリスの最強のライバルとして登場するのが、オリンピックの射撃メダリストだったという男ムスタファ（サミー・シーク）だ。

本作のパンフレットは税込み価格820円と少し高いが、「REVIEW」や「COLUMN」がたくさん載っており、その内容はメチャ豊富。そして、そこには「銃器解説」もあり、「マクミラン TAC-338A」と「SOCOM MK-13」が解説されている。それによると、クリスは「マクミラン TAC-338A」を使って、「実に1920mもの遠射を成功させた」ことがわかる。クリスとムスタファとの対決が、『スターリングラード』に見たヴァシリとケーニッヒ少佐の対決と同じような静かな迫力があることはスクリーンを観ていればよくわかるが、この「銃器解説」を読めば、それがより理解できる

はずだ。

もともと、敵を射殺したことによって自分の位置が敵にバレた後は、自分の命が危険にさらされるのがスナイパーの宿命。クリスの4度目の派遣はムスタファに対する報復が主たる目的だったから、クリスたちの部隊はかなり敵陣深くに踏み込む作戦になっていた。したがって、コトが成功した後の反撃も激しかったが、スクリーン上でみるネイビー・シールズの隊員たちのチームワークと、孤軍奮闘した後の応援部隊との連携はお見事！本作ではそんなド派手な戦闘シーンと同時に、クリスとムスタファとの静かで孤独な対決に注目したい。

## ■□■伝説の英雄が、なぜPTSDに・・・■□■

本作後半では、4度目のイラク派遣から無事生還したにもかかわらず、戦場と平和な日常との極端な違和感のためPTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状に苦しむクリスの姿が登場する。道路で後続車が近づくだけでパニックになったり、子供にじゃれついている犬を殺そうとしたり、助産婦に絶叫したりというクリスの行動を見ていると、これがホントに「伝説の英雄」？とってしまうはずだ。調査によるとイラク帰還兵の5人に1人が鬱、不眠、不安、怒りの衝動などの精神障害で苦しんでいるというから、それも仕方ない。本作後半は、クリント・イーストウッド監督が本作で描きたかった（？）、そんなクリスの姿がタップリと登場するので、それをじっくりと。

もともと、除隊後のクリスは退役軍人たちへの支援活動をしていたが、本作撮影中の2013年2月2日にテキサス州グレンローズの射撃場で射撃訓練をしているところを元兵士に殺害されてしまったと聞き、ビックリ。なぜ、そんなことになったの？クリント・イーストウッド監督が原作をもとに映画化の構想を練っていた時には、そんな事件は想像すらできなかったはずだから、それを受けて本作のまとめ方に大きな修正を余儀なくされたことは当然。そう考えると、本作の結末は「こんなもので仕方ない」のかもしれないが、私には若干不満がある。これでは、やはりアカデミー賞作品賞はムリと思ったのは私だけではないだろう。

ちなみに、この評論を書いている2月26日付読売新聞には、『伝説の狙撃手』射殺犯に終身刑」という見出しで、本作のモデルとなった「クリス・カイル氏を射殺した元海兵隊員の被告に対し、米テキサス州の裁判所の陪審団は24日、殺人で有罪の評決を下した。被告には仮釈放なしの終身刑が言い渡された」と報道されていた。また、「オバマ大統領は2月12日、退役兵の精神的ケアを強化し、自殺防止を図る法案に署名している」そうだ。被告側は控訴する方針だから、その裁判はまだまだ長引きそうだから、その行方に注目するとともに、本作を契機として、アフガニスタンとイラクへ派遣された米兵の13～20%がPTSDを発症しているという現実をしっかりと考えたい。

2015（平成27）年2月26日記